

# 「本物の体験」をとおして『探究』し続ける資質・能力を育成する 生活科

中西 大・田中 伸一

生活科は、五感をとおしたリアルな活動や体験から学習が始まる。生活科には、飼育活動、栽培活動、おもちゃ作り等子どもたちを夢中にさせる単元が数多くある。子どもたち一人一人が「本物の体験」をすることで、多くの発見をし、思いや願いを膨らまし、どんどん夢中になっていく。どの単元にも共通していることは、子どもたちの思いに沿った「本物の体験」が、子どもたち一人一人に多くの気づきを与え、探究に向かわせることであろう。夢中になった子どもたちにとって生活科は「遊び」を楽しむ感覚で、自分の思いや願いの実現に向けて、今よりもっとよりよくしていきたいとわくわくする学びであると考えている。

本実践は、カリキュラム・デザインを工夫することで、子どもたち一人一人の思いの実現に向けて、切実感をもって探究し続ける姿をめざしたものである。

キーワード：探究、本物の体験、試行錯誤、遊び、飼育

## 1. 研究内容・方法

### (1) 本物の体験をとおした学び

生活科の学習では、五感をとおして体験することから学習が始まる。体験したことを、考え、判断し、表現することで、具体的な個別の対象に対する気づきを深める。考えたことを実際に行い、考え直すなど、思考と表現を繰り返し、改善策や願いを生む活動をとおして振り返る。「本物の体験」をとおして、課題に直面した時、原因を明確にし、各自の体験や経験等から解決の方法を共有しつつ、各自が試してみた結果をもとに、繰り返し原因に対する解決の方法を考えながら思いの実現に向けて取り組み続ける子どもの育成をめざした。

### (2) 発達の段階を視野に入れた探究力と省察性

引き出したい探究の姿は、「主体」の姿として、自分たちの思いの実現に向けて直面した問題に試行錯誤しながら粘り強く学習に取り組む姿をめざした。「活用」の姿として、実際に体験したことや体験する中での気づきを生かし、問題の解決に取り組む姿をめざした。

省察の姿は、思いや願いの実現に向けて試行錯誤する中で失敗や成功体験を仲間と共有し、自分たちの活動をさらに楽しいものへと工夫しようとする姿をめざした。

## 2. 授業の実際【2年生における実践】

### (1) 生活科の学びを深める教材

今年度はヒツジ（ふわみちゃん）を飼育する学習を計画した。飼育活動の価値は、「命」の尊さについて体験をとおして考えることができることである。自分たちの世話や行動1つ1つが飼育している動物の命に直接かかわっていくからである。動物を飼育するには、言葉が通じないことによる多くの苦労があるが、それ以上に心を通わせようと一生懸命にかかわり続ける中で、生き物の温もりから感じられる「命」の尊さを実感していく。毎日共に生活する中で、子どもたちにとって最初はペットとなり、次第に仲間になり、家族になっていく存在であるだろうと考えている。2Bにとって大切な存在であるふわみちゃんが元気に過ごせるように、「自分たちがやっていることが本当にふわみちゃんにとっていいことなのか。」を考えながら一生懸命ふわみちゃんに寄り添っていく児童の姿を期待することができる教材である。

### (2) 探究を生み出すカリキュラム・デザイン

本実践は、生活科で「本物の体験」を中心としたカリキュラム・デザインを行って取り組むものとし、各教科等での学びが、生活科の学びでも活用・発揮できるようなカリキュラム・デザインを行う。加えて、子

どもたちの思いが広がり、繋がるようカリキュラム・デザインを工夫する。

本実践で扱う題材は、1学期の「2B野菜を育てよう」から繋がり、「2B秋冬野菜を育てよう」と関連させながら学習を進めていく。「雑草、間引き菜等もムダにせず、肥料も自分たちで作りたい。命のバトンを繋げたい。」という子どもたちの思いの実現に向けて、雑草を食べてくれて、ウンチを肥料にすることをめざす「2Bヒツジを飼育しよう」に繋がっていく。更に、町探検単元では、ふわみちゃんが元気に過ごせるようにプロである和歌山城動物公園の飼育員の思いや努力に迫っていく。道徳科で「生命の尊さ」について考え、国語科「かんさつ名人になろう」で学習した観察の視点を活用しながら、「本物の体験」とおして実感を伴って「命」の尊さについて理解できるようにしていく。

### (3) 探究を生み出す単元計画

「ふわみちゃんとZOOっと！」の単元計画を以下に示す。ただし、便宜上単元を分けており、並行したり、前後しながら取り組む場合もあった。

<b>ふわみちゃんとZOOっと！</b> (35 時間)	
<b>【2学期単元】 2Bヒツジを飼育しよう</b> (23 時間)	
第一次	ヒツジをそだてよう！ ヒツジについて調べよう！ (2 時間)
①	ヒツジについて調べよう【知】
②	ヒツジを飼育する計画を立てよう【態】
第二次	仲良く元気に育てよう (10 時間)
③	ようこそヒツジさん！【態】
④	ヒツジのお世話を始めよう【態】
⑤	ヒツジが元気に過ごせるための方法を考えよう【思・判・表】【本時】
	・好きなエサってどれかな
	・散歩コースを考えよう
	・ヒツジのストレスを解消しよう
	・フンを肥料にしよう
	・飼育員さんに尋ねよう【知】【態】
第三次	ふわみちゃんが元気に過ごせる環境を作ろう！ (6 時間)
⑥	ふわみちゃんの遊び場を作ろう！ 【思・判・表】
第四次	ふわみちゃんの良さを知ってもらおう！ (5 時間)
⑦	2B ふれあいふわみちゃんパーク 【思・判・表】

### 【3 学期単元】 もっと知りたい和歌山城動物園

(12 時間)

第一次 和歌山城動物園に行こう！ (4 時間)

①和歌山城動物園に見学に行こう【態】

②和歌山城動物園での飼育の工夫を話し合おう【知】

第二次 もっと知りたい飼育員さんの思い (5 時間)

③和歌山城動物園の飼育員さんに飼育の工夫を尋ねよう&エサやり体験をしよう【知】【態】

④飼育員さん体験をしよう【態】

⑤飼育員さんの思いについて話そう【思・判・表】

⑥飼育員さんの思いについて尋ねよう【知】【態】

第三次 魅力発信プロジェクト (3 時間)

⑥和歌山城動物園の魅力を発信しよう【思・判・表】

### (4) 探究作りのしかけ

本実践は、子どもたちの思いに沿った「本物の体験」とおして、切実感をもって自分の思いを実現していく姿をめざすために、主として3つの「しかけ」を行った。

#### ① 本物の体験

子どもたちは本物のヒツジ(ふわみちゃん)とかわる中で、たくさん思いや願いをもつ。毎日かわる中で、ふわみちゃんの思いや願いを自分のことのように考えるようになる。そして、ふわみちゃんの存在が次第にペット→仲間→家族のような存在になっていき、互いの思いや願いの実現に向けて主体的にかかわる姿につながっていくと考えた。

#### ②本物のプロとの交流

子どもたちが思いの実現に向けて一生懸命調べ、取り組んでも必ずうまくいくことばかりでない。「困ったな。どうしよう。」と悩んだときに頼ることができるのが飼育員である。動物に対する知識だけでなく、思いや飼育の工夫に触れる中で、自分たちが体験しているからこそプロとして仕事をする飼育員のすごさに気付くことができると考えた。

#### ③思いの実現に向けたカリキュラム・デザイン

子どもたちの「やってみたい！」という思いの実現を支えるために、カリキュラム・デザインを工夫した。今回は、子どもたちの「命のリレーを大切にしたい！」という思いを実現するために、前半を「飼育」単元、後半を「動物園の飼育員」単元として、飼育員の思いに迫れるように工夫した。子どもたちの思いや願いがどんどん膨らんでいくことができる「教材」を選定することが、子どもたちの探究し続ける姿につながると考える。

## (5) 授業をとおして

<前時までのかかわり>

子どもたちは、1か月間ふわみちちゃんとかかわり、たくさんの発見をしてきた。それは、ふわみちちゃんにしてあげて嬉しかったこと、ふわみちちゃんと一緒にできて幸せだったこと等である。また子どもたちからは、「最近太ってきていて心配だな。」「散歩がうまくできないよ。」など困っていることも出された。一人一人がふわみちちゃんとかかわって発見した多くの思いをもって本時に臨んだ。

<本時>

<本時の授業構成>

- ①ふわみちちゃんへの思いを話し合う
- ②心配事の共有（太ってきたぞ!）
- ③どうすればいいか話し合う
- ④これからの飼育活動に生かす

今までの飼育体験をもとに、子どもたちのふわみちちゃんへの願いを話し合った。「ふわみちちゃんが元気で育ってほしい!」という気持ちがみんな同じであることを確認した後、子どもたちから「でもまだストレスがありそう。」と現状のふわみちちゃんを心配する声が上がリ、めあてとして「もっと元気にそだてるために、ストレスをなくすために話し合おう。」を子どもたちが設定し取り組んだ。

### ①ふわみちちゃんへの思いを話し合う場面

～ふわみちちゃんとかかわって2Bのみんなが嬉しかったこと～

- ・餌を食べてくれること
  - ・ふわみちちゃんから来てくれること
- 「毎朝ふわみちちゃんにおはようって言ったから、顔を覚えてくれた。」など自分の体験をとおした発見について話し合う中で、「自分たちの嬉しいこと」という視点から、ふわみちちゃんのストレスについての話に移った。

### ②心配事の共有→③どうすればいいか

→④これからの生かす場面

<困ったこと>

ストレスは少なくなってきているけど…。

- ・食べ過ぎていて太っている
  - ・散歩がうまくいかない
- という発言やつぶやきが出た。

- ④「食べ過ぎて太って、病気になるかもしれない。太っているからストレスになるかもしれない。食べ過ぎも問題だと思う。」
- ③「1か月前と比べると太ってきていると思う。太っていることが（ふわみちちゃんにとって）ストレスかも。」

- ⑤「太りすぎると歩けなくなる。」  
教師「餌を食べてくれると嬉しいんじゃないの?」
- ⑥「だけど…。」
- ②「食べてくれるの嬉しいけど、病気にかかってしまう。」
- ⑬「（ふわみちちゃんも）食べたいとは思っているけど…。」
- ⑦「食べてもらえると嬉しい気持ちになる。食べてくれると大きくなるから嬉しいけど…太ると動きが取れなくなるし、病気にかかると命が守れてない。」
- ⑭「餌を食べてくれると嬉しいけど、食べ過ぎて病気になると（餌を食べてもらって）楽しい気持ちから悲しい気持ちになる。それはふわみちちゃんも同じだから餌の量を考えるべき。」
- ⑯「ふわみちちゃんも2Bも牧場の人も、（ふわみちちゃんのお母さんも悲しい気持ちになるのは同じだと思う。本とかで調べていきたい。」

※番号は児童の出席番号

ふわみちちゃんが太ってきているという事実から、原因を考え、話し合った。ふわみちちゃんが、エサを食べてくれると嬉しいという2Bの気持ちや、ふわみちちゃんもエサをもらおうと嬉しいという互いの気持ちを確認することができた。そして、更に「互いの気持ちが同じ。だけど…。」と互いの気持ちより大切な「ふわみちちゃん健康、そして命に係わる問題につながっていくかもしれない。」と気付いていった。(図1) 飼育体験をとおして「命」の大切さを実感していた子どもたちは、一人一人が「互いの気持ち」も大切だけど「命や健康を守ることの大切さ」という視点で今後に向けて考えることができた。



図1 「だけど!」から気付きが広がり話し出した場面



図2 話し合いの根拠になる「毎日のふわみちちゃん日記」

## (6) 授業の考察

1か月間、ふわみちゃんとかかわる中で、一人一人が多くの発見をしていたことが伝わってきた。「本物の体験」は、授業者が思っている以上に子どもたちに多くの経験と気づきを与えた。本時において子どもたちが、ふわみちゃんとかかわる中で発見を嬉しそうに話す中で、「だけど！」と子どもたちが活発に話し出した場面に出合った。生き生きと話す子どもたちの姿を見て、「この瞬間気づきが生まれる・広がっていったのだ。」と感じた。これほどまでに子どもたちが一生懸命ふわみちゃんのことを考えて、話し合う姿は生活科部がめざす姿を実現した瞬間だと考える。

今後も一人一人の思いを話し合う時間を大切に、一人一人の気づきを共有し、気づきが生まれ、気づきの質を高める授業をめざしたい。

## (7) 成果と課題

子どもたちが自分たちの思いの実現に向けて取り組めるカリキュラム・デザインを行ったことで、子どもたちは学習への思いを途切れさせることなく熱中して取り組むことができた。子どもたちの思いや願いが予想以上に膨らんでいったのは、本物の体験をすることができたからであると考えて。自分たちが知っていることと、実際にふわみちゃんを飼育する中でうまくいかないことの差異により、子どもたちが自分自身の問題として受け止め、試行錯誤を進めていった。長期間の飼育期間によるふわみちゃんへの思いの深まりが、自分たちだけの思いだけではなく、ふわみちゃんの立場に立った視点の大切さに気づき、みんなが幸せに過ごすためには、両者の思いを尊重していくことの大切さに気付くことができた。

課題としては、カリキュラム・デザインをより整理して取り組む必要があると感じた点である。子どもたちの思いや願いが膨らむにつれて活動はよりダイナミックなものとなる。教科間の繋がりをより意識したカリキュラム・デザインをすることで、よりよい問題解決に向けた学びを行っていきけるのではないだろうか。そのためには、教師として、教材の可能性を再度見直し、子どもたちの思いや願いが継続的に膨らみ、熱中しながら取り組めるカリキュラム・デザインを考えていく必要がある。

## 3. 授業の実践【1・2年複式における実践】

### (1) 共通テーマの設定による学びの広がり

複式学級の生活科において、異学年で共通のテーマを設け、学年に応じた学習課題を設定した。そこでは、異学年交流が発生し、互いに課題意識をもったり、協力し合ったりしながら学びを深めることができる

うと考えたからである。

共通のテーマは「シャボン玉」とし、1年生には、「どんなシャボン玉ができるかな？」2年生には、「シャボン玉遊びの道具を作ろう！」という学習課題を設けることとした。

1年生の子どもたちは、シャボン玉遊びをとおり、遊ぶ楽しさ・シャボン玉と自然の関係・面白さに気付くとともに、遊び場におけるマナーを守り、安全に正しく利用できるようにすることを目標にした。

2年生の子どもたちは、身近にある物でシャボン玉の吹き具を作って遊ぶ活動をとおり、試行錯誤を繰り返しながら遊びを工夫し、面白さや不思議さに気づき、遊びを創り出せるようにした。

### (2) 発達の段階を視野に入れた探究力と省察性

低学年期においては、疑問をもつことから興味関心が強くなり、友達や大人から情報を得ようとする。また、観察力が増すことで空想から想像へとつながり、他者の情報をよく吸収して思考する。そのため、ふわりと浮く不思議さをもち合わせた誰もが楽しめるシャボン玉を題材にすることで、多くの疑問を見出しながら主体的に探究しようとする姿に導けるはずだと考えた。教師から遊び方を指示するのではなく、子どもがやってみようことを大切にして試させる「実験」の要素を大きく取り入れることで、アイデアを出したり、試したりしながら進んで取り組む姿を思い描いた。

また、試行錯誤する中で失敗や成功体験を仲間と共有し、自分の活動をさらに楽しいものへと工夫しようとする省察性へとつなげられるようにした。ここでの省察性は、授業時間に表れるものばかりではない。休み時間にシャボン玉遊びの続きを楽しんだり、吹き具を作り変えたりする中で、さらに試行錯誤が生まれ、省察性が生きるだろう。つまり、遊びを継続する中で長期的な省察性が見られると考えた。

### (3) 教材のもつ主体的な学びの要素

シャボン玉遊びは、本学級の子どもたちに限らず多くの子どもたちが好きで、誰もが容易にできる遊びである。大人であってもふと思い出して遊んでみると童心に返って楽しむことができる。さらに、自然の光を受けて様々な色を見せたり、風や気温の影響を受けて飛び方が異なったりする。そのため、どんなシャボン玉をふくらませたいかなど、子どもたちのイメージの幅を広く扱える対象だと考えている。

また、子どもたちの願いである「大きくふくらみ、長時間割れにくいシャボン玉」を作るため、液や吹き具を様々な製作できる教材である。おもちゃ作りの視点と、遊びの視点を同時に取り込める教材である。

#### (4) 授業をとおして

両学年ともに、シャボン玉遊びをした。同じ遊びをする中で、学年によって異なる課題を設定した。

1年生は、2年生が作った吹き具でどんなシャボン玉ができるか楽しみながら遊んだ。遊ぶ前には、2年生から吹き具の説明やできるシャボン玉の予想を聞いた(図3)。2年生が星の形や雪だるまのようにつながったシャボン玉を作ろうと考えながら吹き具を作っていたため、予想どおりにできるかと期待している様子が伺えた。「もしかしたら三角のシャボン玉ができるかもしれない…」などのつぶやきがあったからだ。しかし、できるのは丸いシャボン玉ばかりであり、手作りの吹き具のために、シャボン玉を飛ばすには少し工夫が必要であった。そのため、様々に試行錯誤しながら取り組んでいる様子が見られた。



図3 説明を聞いて期待を膨らませる

2年生は、1年生にどんなシャボン玉ができるのか、自分の予想を伝えてからのシャボン玉遊びとなった。司会者が全員発表を終えたかどうかや、めあてに合った振り返りができるように声をかけるなどしていた。シャボン玉遊びでは、自分たちが作った吹き具が予想していたように機能しない(図4)ことから、なんとかして1年生にシャボン玉を作らせてあげようとしている姿が見られた。シャボン液がうまく付かなかったり、なじまなかったりする構造になっていたものを修正する姿が見られた。また、吹くのではなく手で動かして風を当てることでシャボン玉ができやすくなることなどに気付く子どもがいた。



図4 三色だんごができる予想だったが…

#### (5) 授業の考察

1年生は、2年生による吹き具の説明を聞くことで、嬉しそうな表情を浮かべていた。ただシャボン玉遊びをするのではなく、今回はどんな事が起きるのか、どんなシャボン玉遊びができるのかという見通しに似た期待が具体的にイメージできたのだと考える。実際に、2年生がシャボン玉のできる様子を絵にして見せるなどしていたことから1年生のイメージが明確化されていたことが考えられる。

2年生は、振り返りで「優しく吹くと…」などのように発言していたこともあり、シャボン玉遊びをただの遊びの時間にせず、自分なりに実験をしてわかったことなどを共有するようにとしかけた。単元全体をとおした「自分たちの研究」というしかけが生きていたように考えた。また、「最初はこんな形だと思っていたけど、こんな形になった。」など、予想を立てた上での新しい発見や気づきがあったことを振り返ることもできていたためである。

両学年ともに、子どもたちが何度も試している様子が見られた。シャボン液をコップに入れる時に失敗したり、ストローをハサミで切って調整したりしながら進める姿である。誰一人として諦めずに、次々と自分なりの方法を見出して試行錯誤していたのは、楽しいことから学びの楽しさを感じられるようになっていたからだと考える。ただし、振り返りの段階では、これらの学習活動を共有することが不十分であったため、言葉にならない気づきを言語化し、学びをとらえられるようにする指導が必要だと考えた。

振り返りでは、授業者がめあてに立ち返らせるように促したために、めあてに沿った振り返りができていた(図5)ものの、「うまくできなかったけど、だんだんできるようになった。」という発言に対しては、それ以上に深まりがなかった。「どうしてできなかったのかな？」などと授業者が問い返すことで、さらに学びに深まりを与えられるようにしたいものである。

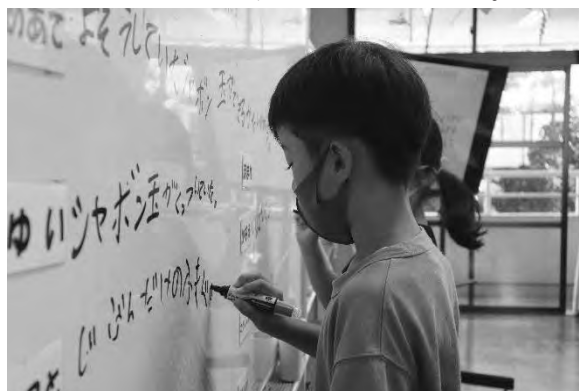


図5 振り返りの様子

## (6) 成果と課題

### <成果について>

- ・テープで吹き具を作っている子どもが多く、すぐに破損していた。しかし、そのような作りだからこそ、しっかりつながっていないとシャボン玉ができないという気付きにもつながったため、試行錯誤の姿が見られた。
- ・シャボン玉遊びの探究が、試行錯誤のある学習活動につながった。生活科では、目の前の事象にかかわり、課題が生まれ、学習活動やその後の生活体験へとつながることからも、単元構成も含めて子どもたちの探究を継続するものになっていた。単元を終えてもシャボン玉遊びや吹き具の制作を続けていることから読み取れる成果である。
- ・授業者の「どんな形になるの?」という問いかけに対して「星?」などの子どもの返事があった。さらに、「どんどん星がでてくると楽しいね。」など、子どもの気持ちを高める声かけやしかけを多く用意できた。

### <課題について>

- ・めあてにこだわりすぎた授業者の支援は、子どもたちの振り返りの幅を狭めていた可能性がある。
- ・評価では、遊んだ器具について具体的に振り返るということについて、子どもたちは自分たちの活動のプロセスの振り返りをしていった。振り返りの視点は大人目線になりすぎないように設定したい。
- ・さらに広い場所で学習活動を行うことで、走るなどしてシャボン玉を膨らませることができ、新しい気づきにつながった可能性がある。(ビデオ配信の都合上、活動範囲が制限されていたため。)
- ・振り返りでは、間接指導により具体的な内容に迫ることができていなかった(図6)。そこで、2学年同時にしてはどうかと考えた。めあてはそれぞれにあるが、「道具がこうなっているから、こんなシャボン玉ができた。」など、より具体的な振り返りができた可能性がある。

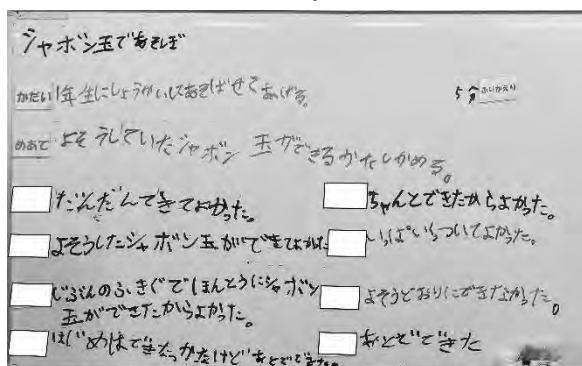


図6 2年生の振り返り

### 参考文献

- (1) 汐見稔幸(2021).『教えから学びへ』. 河出新書